
平行線上の屑と最強

逆刃刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平行線上の屑と最強

【Nコード】

N1908Z

【作者名】

逆刃刀

【あらすじ】

末世という未知の恐怖を世界が迎える中。極東・武蔵には生徒会長兼総長の「不可能男」の他に「屑」と呼ばれる少年がいた。そして少年の近くにはいつも「最強」がいた。少年は言う。

「俺はいつか最強になって、末世から世界を救ってみせる!!」

愛称と称号（前書き）

二つ目の作品です。

ちよつと説明を省いてる部分もありますが、許してね

愛称と称号

空がある、雲がある、太陽がある。

朝の空にはいつもと変わらない景色がある。そして空を横切る巨大な影がある。船だった。八つの艦からできた巨大航空都市は、名を「武蔵」と言い、空を突き進む。

「うん。今日も天気が良くて風も気持ちいいな」

武蔵の中央後艦、奥多摩の高台で一人の少年が空を見ている。黒髪でクセのある短髪、武蔵唯一の学校である「武蔵アリアダスト教導院」の制服に身を包んだ少年の背には一本の線がある。灰色の、日本刀の柄をもつ大剣だった。少年は大剣の柄に触れる。そして誰もいない空に向かって一言。

「今日も最強目指して頑張りますか」

同じ頃、奥多摩の前にある艦、武蔵野にも空を見ている少年がいた。奥多摩の少年とは逆の黒髪の長い髪を後ろで束ねている彼の背にも一本の線がある。しかし彼のは大剣ではなく、純白の長銃だ。風に後ろ髪をなびかせながら一言。

「今日も屑にならないように気を付けなくちゃな……」

朝 8：30

奥多摩の上。武蔵アリアダスト教導院の門と校舎の間の橋から女の
声が生まれた。

「8：30だよ」

陽気な声が、校舎側に響く。

「三年梅組集合。いい？」

橋の上には、声の主の他にいくつかの人影がある。

まず門側の女性、黒い軽装甲型のジャージに背には長剣を携えている。
彼女の正面には黒と白の制服を着た個性豊かな若者達がいる。
彼に対し、彼女は笑みを作った。

「では、これより体育の授業を始めます」

教師、オリオトライ・真喜子は今回の授業の内容を生徒達に説明する。内容はここから右舷一番艦である品川の先にあるヤクザの事務所までついていく簡単なものだ。何故ヤクザの事務所に行くのかと言うと、そのヤクザがオリオトライの住んでいた所を地上げて最下層に行きになり、その後色々あつて、ようはオリオトライの報復である。半分は彼女のせいなのだが彼女は全く気にしていない。

「始める前に休んでるの、誰がいる？ミリアム・ポークウは仕方ないとして、あと、東は今日の昼間に帰ってくるって話だけど、他は

」

彼女の問いに周囲がそれぞれの顔を見渡す。すると六枚の金翼を背にもつ、「第三特務 マルゴット・ナイト」が、黒い三角帽を被り直して、

「ナイちゃんが見る限り、セージュンとソーチョー、それにクーちゃんとやーちゃんもいないかなあ」

その声に、彼女の腕を抱いてる六枚の黒翼の少女「第四特務 マルガ・ナルゼ」は首を傾げる。

「正純は今日自由出席の筈。総長……、トーリは知らないわ」

「トーリは遅刻、かな？ 生徒会長で総長なのにコレはいかんねー」

彼女の台詞に、みんなは力ない笑みを作った。オリオトライは表示

梓に何かを打ち込んで、もう一度みんなを見渡す。

「それで、九龍・ズバルド（くりゅう・ずばるど）と八銃・ワイアット（やじゅう・わいあつと）。この「屑」と「最強」さんは何処にいるか知ってる、浅間？」

「ふえ！何で私に聞くんですか！？」

長身の黒髪、左目に緑の義眼を入れた「浅間・智」という名札の少女は自分を指差して驚く。

「だって浅間、よく九龍と一緒にいるじゃん？」

「プライベートの事まで知りません！！」

浅間が声を上げると同時に、階段をかけ登る二つの影が現れた。大剣と長銃を背負う二人の少年は階段を登り終えると、そのまま集団の中に合流する。みんなが、えっ？と首を傾げるが、大剣の少年が右を、長銃の少年が左を見て口の動きだけで、

『黙ってる……！』

と訴えている。しかし、合流する時にオリオトライの顔を悠然と通っていたので、当然バレており彼女は別段怒った様子も見せずに、

「二人とも遅刻なんて珍しいねえ」

オリオトライの笑みに安心して二人は一步踏み出す。先ず「九龍・ズバルド」という名札を付けた大剣の少年が、

「空を眺めてたら時間を忘れちゃいました」

対する「八銃・ワイアット」の名札を付けた長銃の少年は、

「雲と鳥を眺めてたら時間を忘れてました」

「よくわかったわ。二人とも今日から一週間教室とトイレ掃除ね」

「ひどッ！やっぱりこの教師めっちゃ怒ってんじゃん」

九龍が悔しそうにしているが、八銃はため息だけをついている。

「屑の九龍はともかく、八銃はしっかりしないと折角の最強の称号が泣くわよ？」

最強の言葉に八銃は渋い顔をする。彼は名札の隣に書かれている最強の文字をなぞる。

「最強」それは八銃が聖連より与えられた唯一にして絶対の称号。何故彼が最強を譲り受けたのかは誰も知らないが、極東全体での大会があつたわけでもないのに、いつの間にか称号を持っていた。

「別に、最強なんて俺にはどうでもいいんですよ」

「いらないんだつたら俺にくれ！！」

九龍が物凄い勢いで迫ってきた。八銃はうざつたそうに背中の中銃の銃口を九龍の口にねじ込む。

「痛い痛い！ちょっと常識考えよ！？そんなの浅間でもやらないよ」

「九龍君それどういう意味ですか！？まるで私が人に弓矢を向けるみたいに　って、なんでみんな頷いてるんですか！！」

「とにかく、最強に未練はないけど、屑にやるほど甘くねえよ」

「ケチィ」

九龍も名札の隣にある屑の文字をなぞる。

『屑』これは九龍の称号ではなく、ただの愛称である。九龍とズバルドの頭文字をとって屑。最初はみんなも抵抗があつたが、今ではみんなが躊躇いもなく彼を屑と呼んでいる。彼自身屑と呼ばれることに嫌みを感じてないのもみんなが屑と呼ぶ理由の一つだ。

「さあ、お話もここまでにして」

女教師がわずかに身を低くした。そして彼女は、今の動きに瞬間的な反応をした者達を見て、

「いいねえ、戦闘タイプなら今ぐらいは出来ないかね。ルールは簡単よ、事務所にたどり着くまでに先生に攻撃を当てることが出来たら」

告げる。

「出席点を五点プラス。意味解る？　五回サボれるの」

最後の言葉に、みんなが表情を変えた。ただ遅れた二人だけは、

「なあ、事務所って何処だよ？」

「知るか、とにかく先生がどっかに着く前に一撃喰らわせればいいんだろ？」

二人が納得したように頷く。他のみんなは「第一特務 点蔵・クロ スユナイト」と「第二特務 キヨナリ・ウルキアガ」がボーナスポイントなどと下らない事を言っているのが聞こえたが、オリオトライが半目で何かを言うと二人は電源を落とされたラジオのように黙った。彼女は一度みんなを見渡すと、

「んじゃ」

え？とみんなが気づくよりも早く、オリオトライは跳んだ。彼女はそのまま品川へと一直線に向かう。反応が三瞬ほど遅れた後、点蔵の

「……追え！！」

叫び声と共に生徒達は一斉に走り出した。

愛称と称号（後書き）

いかがですか？

案外更新は週一ぐらいになりそうです。できるだけ頑張っ更新します！！

応援・感想心待ちにしております。

先生って本当に人間か？by九龍

右舷二番艦・多摩は、石造りの町と自然公園を表層部に持つ。その表層部に住まう彼らは、皆、一樣に上を見ていた。高さが不揃いな屋根の上。そこを、騒音が突っ走っている。音が通るのは一瞬。まず、商店街の上で、光の郡が弾け飛ぶ。それを見ている文具屋の主人が、鎧戸を閉めながら呟く。

「連射重視か、いい選択してるな。屋根上一直線ならそれで充分だ。……普通の相手だったらな」

相手。飛び来る光の弾をオリオトライは走りながら長剣を胸前に構え、鞘ごと振りかぶり

「！」

迫ってくる光の弾を弾いていく。彼女は後ろ向きで屋根の上を走り、屋根上を跳躍していく。彼女が藁葺きの屋根から石造りの屋根に移ったとき、後ろから追ってくることに気付く。

追っては二人、大剣の柄に手を触れながら走る九龍と白い長槍を持つ眼鏡の少女アデーレだ。

「やっぱり最初は二人が来るのね！」

「Jud・だって私、脚力だけが取り柄の従士ですから！」

「俺が一番に先生とやりたいただけだよ！」

二人は同時に足に力を入れる。アデーレの足元には加速と書かれた標示枠が、九龍の足元には疾走と書かれた標示枠が現れる。

「先生、いきますよ!!」

「九龍・ズバルド。一太刀入れるぜ!!」

標示枠を蹴り、二人は加速してオリオトライに向かう。

アデーレは長槍をつき出す。オリオトライは慌てる様子も見せず長剣で受け止める。アデーレは攻撃の手を緩めず、連続で突きを繰り出す。しかしすべてが受け止められ、三回目の突きでオリオトライはアデーレの長槍を受け流し体勢を崩す。

オリオトライは鞘に入れたままの長剣をゴルフのように振りかぶる。アデーレも体勢を直そうとするが、体制が整うよりも早く長剣が振り抜かれる。しかし

うっん、おかしいわねえ。

オリオトライは考えるよりも先に行動する。振り抜く体制で、彼女は無理矢理後ろに飛ぶ。するとアデーレの後ろからオリオトライのいた位置に大剣が振り下ろされた。九龍だ。彼はずっとアデーレの後ろで機会を伺っていたのだ。タイミングも悪くはなかった、悪いとすれば、

「最初から黙っていれば、もっと上手くいったんじゃない？」

「先生にバレずに出来るのは点蔵ぐらいだよ!」

今度は九龍が前、アデーレが後ろの形で女教師に近づく。

九龍が大剣を振り下ろす。大剣は空を引き裂いてオリオトライに一直線に向かう。彼女はそれを難なく左に避けるが、同時に九龍の右脇をアデーレの長槍が通る。さらには九龍の足もオリオトライの足

を狙う。

さあどうする、先生！？

このままなら串刺しか脛を蹴れるが、オリオトライなら確実に二つをかわしてくる。仮に槍を長剣で防いで蹴りを体を捻って避けたとしても、後は武器を手放して二人でオリオトライに何らかの攻撃をすれば当たる。そう確信している九龍は一瞬だけアデーレを見る。彼女も解っているようで、しっかりと頷き返してくれる。いける！

「おいしいわねえ」

オリオトライは長剣を屋根に浅く突き刺し、棒高跳びの要領で己の体を空に上げる。先に突き出した槍が長剣に当たり、反動で後ろに引き下がるアデーレ。これも予想通りだ！

「今だハッサン！」

「OKデース」

声と共に屋根裏から現れたのは、頭にターバンを巻いたハッサン・フルブシだ。彼は両手でカレーの入った大皿を持ち上げている。

「カレーは、友達デース！」

言っていることに疑問を持ちながらも、九龍は勝利を確信する。今オリオトライの身体は空に浮いている。長剣は屋根に刺さったままだから使えない。そして空に浮いた身体は満足に動けない。正直、カレーをぶちまけただけで攻撃になるかは微妙だが、言い訳なら後でいくらでも出来る。

ハッサンがカレーの皿を傾けた瞬間、二人の間に誰かが割って入った。

「えっ？」

驚きの声はオリオトライ以外の三人が上げる。そして九龍は間に入った人物がアデーレある事に気付いた。
何故だ？と疑問に思うと同時に答えが出た。

「ベルトか！」

鞄のベルト。それがアデーレの制服に絡まっている。何時やったのかは知らないが、オリオトライはベルトを鞄から外し、アデーレが反動で後ろに下がったときにベルトのフックを彼女の制服に引っかけていたのだ。後はベルトを引っ張れば軽いアデーレは簡単に引き寄せられ、彼女を盾にした。
ハッサンはすぐに手を止めるが、動き出した皿は止まることなくカレーはアデーレに注がれる。

「ぎゃああ！熱いです！辛いです！！」

カレー、充分攻撃になってるな。

内心で感心してる九龍の前。女教師はカレーまみれのアデーレをハッサンにむかつて投げる。二人は見事に衝突して屋根裏へと消えた。オリオトライは指に付いたカレーを舐めて辛くて美味しいね、と言っている。

簡単にはいかねえか、と苦笑しながらも九龍は後ろの集団に叫ぶ。

「すまん！アデーレとハッサンがやられた。誰か救つて！」

すると、走っていく集団の中、書記である眼鏡の少年ネシンバラが、

「イトケン君！ネンジ君！お願い！」

言葉と共に、集団の中から一つの影が飛び出した。全裸の筋骨たくましい男、インキュバスの伊藤・健児だ。彼がハッサンに、朱色のスライス、ネンジがアデーレの元に寄るのを見て一息つく九龍。直後に己の行動を後悔した。振り返ると手に戻した長剣を振り上げるオリオトライがいた。

「人の心配するのはいいけど、自分の心配もしないと」

「先生は逃げるだけじゃないんですか？」

身体に寒気を感じながらも、問う。オリオトライは笑顔で

「いやあ、今やつとかないと屑はしぶとそうじゃん」

長剣を振り下ろした。

音が町中に響き、一瞬町が静寂に包まれた。後ろにいた集団の誰も
がオリオトライによって九龍が屋根にめり込まれてると思っていた
だが現実違った。九龍は屋根にめり込むことなく無事である。対
するオリオトライは振り下ろしたはずの長剣がまた振り上げられた
状態にある。

「ありあ？」

今度はオリオトライも声を出す。二人の動きは止まっていたが、九

龍の顔の横すれすれを三つの光の弾が通る。

「おっと危ない」向かってくる弾を一発はかわし、二発は長剣で弾いてまた走り出す。オリオトライは屋根を飛び越えながら弾が飛んできた方を見る。彼女の視界には誰もいない。しかし彼女には誰が撃ってきたかは解っている。

「相変わらず精密過ぎる射撃だね。 まっ、最強なら当たり前か」

先頭で女教師と生徒達のバトルレースが行われてる中。その遥か後方、最初にみんながいた階段の下、後悔通りと呼ばれる右舷中央通りを歩く影がある。数は三つ。一つは御広敷という名札をつけた丸い体型の少年。もう一人はポニーテールで目が見えないほど伸ばした前髪をもつ少女、向井鈴。最後は長銃を持った八銃ワイアットだ。彼らは戦闘中の生徒達とは違い、後悔通りをゆっくりと歩いている。

「小生思いますに、このままでいいのでしょうか？」

御広敷の問いに八銃は何がだ、と言う。

「だって、わ、私達、なに、も、してない、から……」

鈴が答えたのを聞いて八銃は成る程と頷く。彼はただどさと前置きして、

「お前達は戦闘系じゃないだろ？だから別にいいんだよ」

「でしたら、八銃君はどうなるのです。バリバリの戦闘系では？」

御広敷の言葉に八銃は顔を歪める。

「お前見てわかんない？俺は今バリバリ戦闘に参加中だぜ」

そう言つて八銃は長銃の引き金を引く。撃ち出される弾はそこら辺に落ちていた木の実だ。しかし撃ち出される木の実は術式によって光を纏い、通常の弾丸よりも速く品川の方に向かっていく。それを傍らでずっと見ていた御広敷は首を傾げる。

「もしかして八銃君は、ここからずっと先生を狙っていたのですか？」

「Jud・俺のお陰であの屑を今救つてやったんだ。でもアデーレとハッサンの時は間に合わなかったけどな。おっと弾切れか」

彼は一旦しゃがんで、近くの木の実をわし掴みにして長銃にセットする。彼は先頭の様子が映った標示枠を出し、それを見てまた引き金を引いた。

彼は木の実を撃ち続けながら通の右側にある石碑を見る。花の飾られた石碑には一人の名前が彫られている。

少女 ホライゾン・A

「ホライゾン、もうあれから十年も経つのか」

眩きながら引き金を引くと、突然御広敷が、

「あっ……！」

と声を作り、標示枠を見た八銃も同じように声を出し、目の見えな
い鈴だけが疑問の声をあげた。

二人が見てる標示枠の中では、余所見をしながら撃った木の実が斬
りかかろうとしていた九龍の後頭部を直撃した。まさかの攻撃に九
龍の頭を押さえて転げ回ると標示枠の方を見る。二人がヤバいと思
うと九龍は大声で、

『浅間！お前俺がそんなに嫌いか、嫌いだからって撃っていいのか
？狙撃巫女なら何でもしていいのか！？』

『ちよつと待つて下さい！私そんな事してませんよ！！やるならも
つと派手にズドンとやりますよ』

『最低だよあんた！！』

標示枠の中では何かもめてるようだが気にしない。だって気にした
ら敗けだもん！

今撃つたらやったのがバレると思い、八銃はとりあえず撃つのを止
めて長銃を背中に戻す。

「九龍君、浅間、さん、け、ケンカ、してる……？」

「ん？ああ大丈夫だよ。あんなのいつもの事さ。なんだかんだで仲
良いんだよあいつ等は」

そう言ってる内に三人もやっした後悔通りを抜けた。目の前には余程

派手にやったのか、周りにはたくさんの穴が開いている。

被害にあった住人達もため息を溢しながらも、いつもの事だと陽気にさつきまでの戦いを語り合っている。八銃は住人達にすみませんと謝りながら進む。

「しかし八銃君、小生そろそろ急いだ方が良いと思うのですが……」

「何でだよ、急いだって何も出来ないだろう？」

「いやそうではなくて、もし遅れたら早朝の教室掃除ですよ」

掃除と言われても、俺と九龍は決定してるのだが。

八銃の考えを読んだのか、御広敷はいやいやと手を振って、

「九龍君と八銃君の場合は、教室ではなくて教導院全部を掃除してもらうと言っていました」

「あのくそ教師がー!!」

叫ぶと同時に八銃は走り出す。右手で御広敷の襟を掴み、左手で鈴を抱えるようにして走り出す。術式は用いてないが、二人を抱えて走っているとは思えない速度だ。

「八銃君、首！首絞まってますから!!」

「うるさいぞロリコン野郎。鈴の二倍以上重いお前をわざわざ運んでやってんだ。寧ろ感謝してほしいくらいだ」

「だからってもっと優しくするべきです。それに小生はロリコンではなく幼女が好きなのです!」

御広敷の言ってることには全く耳を傾けず、八銃は飛び上がると一気に屋根上までいき、屋根上を飛び越えていく。屋根にはナルゼとナイトがやったのか瓦が取れてたりしている。崩れた屋根に若干の走りずらさを感じながらも八銃は更に速度を上げる。そして遂に視界に先生達を捕らえた。

オリオトライは今も悠然と目的地にむかっているが、生徒達はかなりボロボロだ。みんなついていくのがやっとで、八銃が見た限りではまともに戦えるのは九龍に浅間、それに西洋ヘルメットを頭に被った筋肉大男、ペルソナ君ぐらいだ。

「相変わらず化物だなあの教師は」

だったら、

「俺も本格的に参加してもいいよな？」

誰かが答えるわけでもないのに彼は勝手に頷き更に足に力を入れて加速した。

先生って本当に人間か？by九龍（後書き）

いかがですか？

術式について若干理解しきれてない点があるので、少し矛盾してるかもしれませんが申し訳ありません。

流石だぜ、我が同志！b y トーリ

走る屋根上、九龍は現状の悪さに舌打ちをする。現在オリオトライに攻撃を仕掛けてるのは九龍一人。他の皆は付いていくのがやっとで、攻撃出来る浅間が弓矢による狙撃を行っているが、術式をつけてないので牽制程度にしかなくていい。ペルソナ君も元気だが彼は浅間が安定して弓を放つための足場になっているので、直接は戦闘に参加できない。

「もうやれるのは九龍だけ？もっと頑張らないと」

オリオトライが挑発しても、誰一人反応するものはいない。彼女の速度についていくだけで息があがってしまう。そんな皆を差し置いて九龍は加速術式でオリオトライに向かう。

先ずは大剣を横風ぎに振るう。当然オリオトライはかわし九龍も直ぐに次の攻撃に移る。横風ぎに振った勢いを利用して回転し、大剣を振り下ろす。しかしこれもオリオトライの長剣で簡単に弾かれてしまう。

「段々攻撃が単調になってるよ。しっかりしな」

言われなくても解ってる、と九龍は心の中で反論する。教導院からここまで既に数キロは離れているが、その間ずっと走りながら攻撃を仕掛けているのだ。攻撃が単調になってしまうのは当たり前前で、九龍から言わせればオリオトライの方が何故あんなに平気なのか疑問しか持てない。化物が、と思っていると目の前に長剣が迫っていた。慌てて大剣で受け止めるが勢いまで殺せずに体勢を崩された。から空きになった九龍に一撃与えようとしたオリオトライだが、すかさず浅間の弓矢が割って入る。オリオトライが弓矢をかわして

る隙に九龍も持ち直し、一旦距離を取る。

「浅間く、俺もう無理だから諦めていい？」

「駄目に決まってるじゃないですか！出席点五点もかかってるんですから頑張ってください！！」

「えく、だったら浅間も術式使つてよ。流石に一人はきついぜ？」

「私も術式はあと一回が限界ですから出来れば使いたくないんです」

ふーん、と頷きながら九龍は表示枠をだす。表示枠には自分達の現在位置があり、それを見ながら彼はうなだれる。

「もう一キロ切っちゃったから、多分あと四分ぐらいだよな」

「ギリギリまで体力を回復しますか？」

「そうはしたいけど短時間でどうにか出来る相手じゃないんだよな」

またうなだれる九龍。こうしてる間にもオリオトライは目的地に向かっていく。既に皆は住宅街を抜けている。後はたいした障害もないのでこのままだと確実にオリオトライの勝ちになってしまう。またうなだれようとしたとき、後ろから声が聞こえた。

「やっと追いついたわ」

二人が振り返ると、鈴と御広敷を持って全力疾走している八銃がいた。彼は額に汗をにじませながらも息ひとつ乱すことなく二人に並ぶ。

「やっと来たかよ「最強」。丁度いいから手貸せよ」

「言われなくてもそのつもりだ。だけどその前に」

八銃は持っていた御広敷を皆がいるとおもわれる所へ放り投げた。うつ、げっ！、と数回悲鳴に似た声を上げて御広敷は屋根上を転げ落ちていく。

ああやっと軽くなった。御広敷重すぎ、もう少しダイエットした方がいいな。ん？何だ、皆が半目で見ている。おかしいだろ、俺はわざわざ運んできてやったのに。さてと、鈴はペルソナ君に預けて、

「いいかお前達」

八銃は現在戦闘に参加できている皆を見る。

「目的地までの事務所まではもうそんなに遠くない。皆疲れてると思うが、短期戦だとおもえばまだ楽だろ？」

皆がJud・と答えるのを聞いて、八銃は苦笑する。
皆、顔つきが変わったか。

最低でも、後ろで射撃をしていた時よりは皆の顔つきが変わっている。やる気に満ちた顔だ。誰一人としてまだ諦めてない。俺が来たからか？仮にも「最強」を持つ俺がいるから何とかなると思っているのか？嬉しいようで嬉しくない、と八銃は思う。皆が少しでも頼ってくれるのは勿論嬉しい。だけど、仮初めの「最強」に頼りきってしまうのは良くない。もしこの武蔵に何かあった時に自分で考え、行動することが出来なくなってしまうかもしれない。

まっ、武蔵に限って何かがあるわけないか。それに俺も今年で学生

じゃなくなるんだ。そしたらこの「最強」も意味のないものになるんだ。だったら頼られてる内はそれに答えよう。

「まずは九龍、お前は動きすぎだ。後方で待機してろ」

「おいおい、俺はまだやれるぜ！第一近接武術士ストライクフォースの俺が後方でやることあんのか？」

「勘違いすんな、俺はお前に何も期待してないぞ」

「さ、最低だお前！もう少し言葉選べよ！！」

「言葉を選ぶなら、最初に飛ばしすぎて完全にスタミナ切れの屑は、皆の邪魔にならないように後ろで大人しくしててください」

「選んでねえよ！寧ろ酷くなってんだろ！！」

二人が揉め合いになっているのを見ていたオリオトライは手を叩く。

「そこの馬鹿お二人さん。来ないならもう私逃げちゃうよ」

「わかってますよ先生。いいか、浅間はペルソナ君から降りて走りながら撃つてくれ。命中はしないだろうがそれで十分だ。ペルソナ君は鈴を運びながらそこら辺に落ちてる瓦礫とか投げて援護してくれ」

「Jud」

「とうとう無視だな、無視すんだな！だったらいいよ、後ろで大人しくしてますよ。途中で浅間みたくズドンしても、文句言っなよ！」

「だから私はそんな事しません！」

いやいやしてるだろ、と心の中で突っ込み、八銃は長銃を抱える。弾は木の実から瓦礫に変えている。威力は木の実に比べたら格段に上がっているが、オリオトライならどうせ当たらないとおもっての判断だ。

さて準備は整った。八銃は皆を鼓舞するために叫んだ。

「絶対出席点五点取るぞ！」

一回静寂に包まれたのを取り戻すように、品川にはさっきよりも爆音と光が飛び交っている。それを中央前艦の艦首のデッキの上で見守る人物がいる。白髪の間違った中年過ぎの男、酒井・忠次は湯飲みに入ったお茶を飲みながら口元を上げる。

「相変わらず元気だね梅組は。ねえ武蔵さん」

酒井が問いかけさき、肩に「武蔵」と書かれた腕章をつけた黒髪の自動人形はJud・と言って、

「ただ元気があり過ぎるのも困りものです。オリオトライ様のクラスは毎年そうでしたが、今年のはまた一段と激しいと思われます。」

以上」

そうだねえ、と頷き、酒井はまた品川を見る。生徒達は今も積極的にオリオトライに攻撃を仕掛けている。それを見ている武蔵は、

「しかし不思議ですね。何故八銃様はわざわざ前衛に出ているのですか？他に適任者はいると思われませんが。以上」

二人の見つめる先では、確かに八銃が前衛でオリオトライを相手にしている。長銃を振り回したり、射撃をしながら上手くオリオトライに攻撃している。

「武蔵さんは八銃君を遠距離^{ストライクガンナー}武士とってるなら大間違いだよ。彼は全方位^{ストライクマスター}武士だからね。寧ろ彼が前に出た方が皆も安心して援護できるんじゃないかな」

「彼が「最強」だからですか？ 以上」

「最強ねえ…。悪いけど八銃君は「最強」じゃないんだな」

「「最強」じゃないとはどういうことですか。八銃様は聖連に特例として認められた、正真正銘の「最強」ではないですか。以上」

それはね、と言いかけたところで酒井は一度口を閉じる。

これは俺から言うことじゃねえな。本人に言う気がないならそれで良いじゃないか。それを彼が望んだのだから。

もう一度湯飲みに口をつけたとき。酒井は生徒達の集団の中から抜け出す人影がある。今きた道を戻ろうとしているのは、

「あれは九龍君じゃないか。授業を途中で抜け出すなんて、相変わ

らず彼は「屑」だなあ」

「酒井様、九龍様が「屑」であることは否定なされないのですか。以上」

言われた酒井は、湯飲みを武蔵に預け、煙管を取り出して火を付ける。煙を肺に入れ、一気に吐き出して言う。

「九龍君は俺も認める、正真正銘の「屑」だよ」

集団から抜け出した九龍にネシンバラから通信が入る。

『ちよつと九龍君！君だけ何で抜け出してるの！？』

「うるせえ！後ろにいたって何も出来ない俺なんていないと同じだろ。だったらもう俺は抜ける！」

『だから九龍君』

めんどくさくなった九龍はネシンバラとの通信を切った。九龍が歩いているのは品川の町中。彼が授業を抜け出したのは勿論自分がいても何も出来なかったのもあるのだが、本当の理由は別にあった。確かこの辺に……。おっ、いるじゃん。

九龍の視線の先。ゲーム屋の前にできてる列の中にそいつはいた。九龍は軽食屋で買った入ったパンが入った紙袋を小脇に抱えてる少年の名を呼んだ。

「総長兼生徒会長が大人達に混じって何待ってんだよ。葵・トーリ君」

名を呼ばれた少年、トーリは振り返って呼んだのが九龍だとわかった、

「おお、誰かと思ったら我が同志じゃないか」

笑顔の彼は紙袋からパンを取り出し九龍に渡す。九龍はありがと、と言ってパンを口に入れる。まだパンがほんのり温かく、トーリがさっき買ってきたばかりなのが解る。

「それで、我が同志は何待ってるんだ？」

「フッフ、そんなのこれに決まってるだろ！」

トーリが表示枠を出す。映し出されたのは、今日発売の最新ゲームパッケージにはぬるぬるの女の子がいる。つまりは、

「エロゲーかよ」

「何だよその反応は！お前は欲しくないのか！？言っとくけどな、貸してくれなんて言われても絶対貸さねえからな！ついでに今日中

に全部コンプしてネタバレしてやるからな!!」

「フツ、馬鹿が俺を誰だと思ってんだ」

自信げに話す九龍は懐からあるものを取り出す。今トーリが出した表示枠にあつたのと同じパッケージをもつそれはまさしく、

「なっ！今日発売の筈のそれを何でお前が持ってた!!」

「俺は顔が広いからな、行きつけのゲーム屋で前日買ってたのさ！当然昨日の内にコンプしてあんぜ。なんなら今しゃべってやろうか？」

「くそー！まさか先を越されてるとは。だけどナイスだぜ、流石我が同志！」

二人は固い握手をして、お互いの友情を確かめ合う。一緒に並んでいた男達もお互いの意志を確かめ合うように握手をしだす。異様な光景に通行人達は哀れみの視線を送るが、彼らは全く気にしなかった。

その後、商品を買った男達は九龍から最低限の情報だけを聞いてダツシュで家に帰っていった。今はトーリと九龍だけが皆のいるヤクザの事務所に向かっている。トーリから貰った最後のパンを頬張っている、突然トーリが、

「なあ九龍。実は俺、明日コクろうと思ってんだ」

不意に言われたトーリの告白宣言に、九龍はため息をつく。

「ため息か！？同志が告白するって聞いてお前はため息をつくのか！」

「ため息もつきたくなるよ。一応聞くけど、その相手ってもしかして」

ああ、とトーリは前置きして、

「ホライゾンに決まってるだろ」

「やっぱり、そうなるのか」

告げられた名前に、九龍はまたため息をつく。ホライゾン、彼女は元クラスメイトだ。元と言うのも、彼女はもう生きていないのだ。彼女は十年前に亡くなっている。後悔通りで、それもトーリの目の前で。後悔通りには墓碑まで作られてる。

だけどトーリは、

「俺はもう逃げねえ。あの事からも、ホライゾンからもな」

「そうか、まあ俺は告白が成功することを願ってるぜ」

「おうよ、この葵・トーリがビシッと決めてやるよ」

トーリが親指を立てて見せたので九龍も同じように親指を立てる。そして九龍は急に進路を変えて品川をあとにしようとする。

「どうしたんだよ。これから皆にも言っからお前も来いよ」

「いや、ちよつと用事を思い出してな。今日の授業はサボるわ」

「生徒が授業サボるなよ。不良かお前は」

「エロゲのために授業遅れる奴に言われたくねえよ。それに俺は不良じゃねえ、ただの「屑」だ」

それだけ言っつて九龍は早足でその場から立ち去る。品川の町を走り抜けながら九龍は頭を抱える。

「八銃が聞いたらどう思うのかなあ」

何故なら

「あいつもホライゾンのこと、好きだったからなあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908z/>

平行線上の屑と最強

2011年12月17日21時53分発行